

多聞院英俊の病跡

——梅毒を中心として——

中村 昭

一 『多聞院日記』^(一)について

多聞院は奈良興福寺の子院の一つであったが今はない。明治維新の排仏毀釈の際に他の多くの子院と共に廃滅したと思われる。子院のうち、大乘院と一乗院は門跡の寺格を持ち、藤原摂関家の子弟が門主となる慣例があつて重きをなしていたが、これらも同様の運命を辿つた。このうち大乘院は、室町時代に門主だつた尋尊大僧正が『大乘院寺社雜事記』という膨大な記録を残していたので、室町時代史研究の爲の貴重な資料となつてゐる。多聞院はさして重要な寺院ではなかつたが、『多聞院日記』が残つたことによつて戦国安土桃山時代史に重要な資料を提供し、その爲に名前が知られてゐる。^(二)

『多聞院日記』は文明十年（一四七八）から元和四年（一六一八）までの分が伝えられてゐるが、途中何カ所か脱落している。今残っている所の大部分すなわち天文八年（一五三九）から文祿五年（一五九六）の間を書いたのが英俊である。英俊は数え年（以下同じ）二十二歳から七十九歳までの五八年間この日記を書き、それだけで歴史に名を残した。

ただし『多聞院日記』の原文は伝えられておらず、江戸時代の写本が興福寺に残つていたので現在の活字本が印刷された。出版される前から史料の価値は認められていたが、出版後は日本史上の重要史料として広く利用されている。

しかし、医学史上からはまだ充分に研究されているとは言えない。

私は日本医学史学会の一般講演(二十七)において、五回(うち一回は誌上)にわたってこの日記に現われる種々の病名について検討しその概要を報告したが、その後更にこの日記を精読することによって、この筆者の英俊の病跡に重要な事実を見出したので本稿を草した。

この日記の文体は当時の記録文の常として漢文と和文を混淆した変則的のもので、以下これを引用する時には書き下し文にする。引用文中()内の割注は私がつけたのである。

一 わが国への梅毒の渡来と『多聞院日記』に記述された梅毒の概観

まずわが国への梅毒の渡来と伝播について簡単に見ておかねばならない。富士川游『日本医学史』(八)、土肥慶蔵『世界梅毒史』(九)によれば、京都の医師竹田秀慶の『月海録』永正九年(一五一一)の条に「人民多ク瘡有リ、浸淫瘡ニ似ル、是レ膿疱、鰐花瘡ノ類ナリ、之ヲ唐瘡かさ、琉球瘡かさト謂ウ」とあるのが、わが国の記録上の梅毒の初見であるという。また甲斐の『妙法寺記』にはこの翌年に「永正十年、此年天下ニタウ、モト云ウ大ナル瘡出デ平愈スルコトヤム久シ」と書かれているという。

されば梅毒は実際にはこれよりももう少し前に日本に上陸していたのだろう。誰がそれを運んで来たのか。簡単に言ってしまうと、それは当時日本と中国を股にかけて通商交易していた人々だったのだろう。その頃中国の海港は既に梅毒によって浸淫されていたのである。(九)だから梅毒を唐瘡と呼んだのは正しかったのである。琉球もこの頃は独立国で盛んに貿易を営んでおり、そのおまけとして琉球瘡も入って来たのである。ともかくわが国への梅毒の伝来は、ポルトガル船が天文十二年(一五四三)に種子ヶ島に漂着するよりも大分前であったことは間違いない。ついでに述べれば、このポルトガ

ル船というのもポルトガル本国から来たのではなく、マラッカあたりを根拠地としていたものである。⁽¹⁰⁾

『多聞院日記』でも唐瘡という言葉が初めて出て来るのは早くも天文十年である。すなわちある僧が「唐瘡御不例立願、十二カ月十二日満時塩断ノ事云々」ということだが、この言葉を何の説明もなしに使っているから、既によく知られていたものと思われる。この同じ僧は翌年には「唐瘡再発ノ間、蛭ヲカキ申サル」と書かれている。蛭に血を吸わせる治療法を試みたのである。

この他、ヨコネ（横彦）という病名は屢々出て来る。これは要するに鼠蹊リンパ節腫脹だから、必ずしも梅毒性とは言い切れないが、この頃はもう梅毒性のもが多かった様に思われる。特に永禄十年代（一五六〇年代）からヨコネの記載が増え、永禄十二年三月の条には「近般日数ノカサハヤル、然ル処堺津ニ唐人之在リ、秘方ノ説トテ云々」という記事がある。このカサというのが唐瘡と同じく梅毒疹であるかどうか問題だが、私の推測では唐瘡というのは第二期の早期の全身性のバラ疹のことを主として呼び、その後の慢性的発疹は単にカサと呼ばれた可能性があると思う。

なお僧侶が梅毒に罹ることを不審に思う向きもあるかも知れないが、僧侶の破戒は公然の秘密であった。また梅毒は必ずしも性病という認識はなかった。本稿の主題である英後は永禄十二年五十二歳の時に初めて梅毒の第一期症状を記録し、七十九歳の第四期の末期に至るまで様々な症状を自ら記録しているわけだが、やはり性病という觀念はない。また、この第一期から第四期までが共通の疾患であるという認識はもちろんだ。ただし江戸時代になると、第三期のゴム腫あるいは第四期の神経梅毒までも結毒と呼ばれ、下疳、横彦、唐瘡と一連の疾患であるという理解が一部の医師ではなされるに至った。⁽¹¹⁾

私が医史学会総会で報告した時は、ヨコネ（第一期横彦）と唐瘡（第二期発疹）について触れただけであったが、その後、英後の病跡の中に裸役（第一期下疳）と第三期、第四期症状を見出し得たので、以下詳細に記述し検討を加える。

三 多聞院英俊の病跡の検討

英俊は歴史上は無名の僧だったので、その経歴はこの日記によってのみ知ることができる。概略を述べておくと、永正十三年（一五一八）に大和国の土豪の十市城主の家臣筋の家に生まれたと思われる。十一歳で寺に入ったと言っているが、十七歳の時には既に英繁という師についており、多聞院に入っていたと思われる。二十二歳の時から多聞院の日記を書き始めており、その後院主になったと思われるが、正確なことはわからない。文禄五年（一五九六）七十九歳で彼の日記は途絶え、いつ死亡したか不明である。

英俊はおそらく武家（郷土と言うべきか）の出だったので、戦国の政治情勢には常に関心を持ち、見聞したことを逐一記録した。それが現在の日本歴史学上の重要な資料となっている。また寺院経営の一助にもする為、薬の調剤をかなり行なっていたので、自分や身近な人の病氣や治療薬について興味を持って記録しているので、医療史研究の資料にもなるのである。仏教関係の記事が多いことは言うまでもない。

(一) 第一期下疳、横痃と第二期発疹 永禄十二年（一六六九）五十二歳～永禄十三年（一五七〇）五十三歳

最初は次の様に横痃の記載がある。

「永禄十二、三、廿一 今日ヨコネ心ニテ熱氣指ス、薬吞ミ付ク
同、五、十三 ヨコネ所ハレ熱氣指ス、一日平臥セリ」

梅毒性の横痃であれば硬性下疳がそれに先行している筈だが、その記載はない。ただし硬性下疳は無痛性なので気がつかないことも多いと言われる。硬性下疳は通常自然治癒するが、再発することもあるとされている。^(一、二) 下疳と横痃の第一期

症状がおさまってから、第二期の早期発疹あるいは慢性期発疹が現われるわけだが、永禄十二年中には発疹の記載はなく、永禄十三、一、四に次の記載がある。

「小瘡こさ煩わづ間坊へモ出ズ」

小瘡というのは毛囊炎のこととも言われるが、この場合は丘疹状の慢性期発疹の可能性があると思われる。

そしてこの年に次の様に裸役という言葉が出て来る。原文には「らくやく」という振り仮名はついていないのだが、私はそう読んでこれを硬性下疳のことと考える。

「永禄十三、四、十五 風氣裸役一日平臥ス」

同、四、十六 煩同前、以テノ外迷惑セリ、スヰ花ノカツラ葉クキ共ニ入レテ煎物ニテ洗ウ、堯忍房ノ葉ヲ付ク、少シ減ナリ

同、四、廿 裸役減ナリ、祝著々々」

らくやくとは耳馴れない言葉だが、江戸初期の『病名彙解』^(一三)の下疳瘡の所に「俗ニ云フラクヤクノ事也」と書いてある。また安土桃山時代の笑話を集めた『醒睡笑』^(一四)には次の様な文章がある。

「これの殿の羅疫わづをわづらひ、さんさんなるを裏方のかながりて、祈禱のために日を待たせ給ふぞ、かしらを落しては、にがにがしや」

これはかしらを落とすという事をベニスの亀頭が落ちる事にかけて笑い話にしているのだが、梅毒性のものとして成り立つ話である。

らくやくは、まら疫病の略であろうと言われる。江戸後期の『本朝医談』^(一五)には「下疳ハムカシマ、ラ疫病トイフ」と書かれている。室町時代の『福田方』^(一六)には「妬精瘡ヌヤウシトコヲ治スル方、此病ハ男子ノ陰ノ節ノ下ニ出ヅ」という文があり、これが硬性下疳か軟性下疳かすなわち梅毒性か否かが問題になるが、土肥はこれは軟性下疳であろうと述べている。らくやくあるいはま

ら、疫病とは要するにペニスの病氣ということである。成立年代に疑問がある流布本『大同類聚方』^(一七)には、まら、かさや、みという項目がある。

まら、という言葉は隱語の様に思われているが、元來梵語であり、仏教と共にわが国へ入って来た。元は魔物という意味であつたが陰茎の事に転じた。平安時代の『和名類聚抄』^(一八)にも鎌倉時代の『頓医抄』^(一九)にも出て来る言葉である。

さて裸役の説明が長くなったが、英俊がこれの治療の為に使つたスキ花ノカツラというのは今いうスイカツラであり、漢名を忍冬あるいは金銀花と言う。『一本堂薬選』^(二〇)には「諸ノ腫毒微瘡ヲ療シ尿道ヲ通利スル」とある。また『微瘡約言』^(二一)にも見えているが、現在も清熱解毒薬として用いられている。なお、最初「風氣裸役」と言っているのは、下疳と共に微熱でもあつて風氣の様な感じがしたのであろう。

この後、第二期発疹の症状についてははっきりした記載はないが、この年の七月二十四日に「近日目煩イ散々ノ式ナリ」とあるのは見逃せない。何故なら第二期には虹彩炎が高率に起こるとされているからである。^(二二)眼瞼の発疹も多いと言われるが、ここの記載は発疹の様ではない。第二期症状の後、通常何年か潜伏期があつて第三期症状が出る。

(二) 第三期ゴム腫と発疹 天正二年(一五七四)五十七歳〜天正十四年(一五八六)六十九歳

もちろんゴム腫というのは病理学上の概念であるから、症状からそれを間接的に推定するわけだが、次の様に鼻骨がつぶれるという特徴的な症状によってほぼ間違いないのではないかと思う。

「天正三、三、十七 年頭ヨリ鼻ツブレテ香ヲ申候ニテ食味悪シキ間、今日西坊ニ方ヲ申請、薬合セ服セリ
同、三、廿八 食味宜シカラザルニ付キ、薬方西坊来タリ合セタリ」

第三期のゴム腫が鼻骨や口蓋を侵す率は非常に高かつたと言われ、その為に嗅覚が失われ、また鼻中隔も壊れて鼻がつぶれることが多かつた。^(二二) 英俊はこの年の年頭に鼻がつぶれたと書いてるので、少なくともこの前年からゴム腫があつた

と推定される。

そしてこの翌々年には次の様に口中の煩に悩んでいる。これは針治療をして出血したと書いているので、単なる口内炎の如きものではなく、やはりおそらく第三期症状としてのゴム腫が口蓋にできたのだろう。

「天正五、五、四 口中煩散々平臥セリ

同、五、五 煩ウ間社参不能

同、五、六 口中煩平臥セリ

同、五、七 口中煩針沙汰ス、血出ヅ、少シ減ゼリ

同、五、九 口中煩今ニ験ナシ、迷惑セリ」

験は減と同じで病状改善という意味である。

所で第三期にはこの他様々の梅毒疹が出ると言われる。これは第二期初期のバラ疹の様な形は取らない。典型的なバラ疹がおそらく唐瘡と呼ばれたのだろうが、それ以外は一樣に瘡あるいは小瘡と呼ばれた。梅毒以外の腫物や発疹との区別は實際上難かしい。この時期の英俊の場合、天正五年四月には「カサ葉調合セリ」という記載があり、天正八年八月には「首ニカサ出来ノ間ヒルカキ(蛭飼)セリ」という記載がある。項部は晩発性の梅毒疹の好発部位の一つなので、梅毒疹の可能性は多分にあると思われる。

天正十年には梅毒を煩っていた寺男の助二郎という者が十津川温泉へ湯治に行つて来た話を次の様に書いている。

「天正十、八、廿 助二郎トツ川ヨリ帰ルトテ来ル、目煩虫氣雜熱殊ニ唐瘡ニ以テノ外妙ナリト申ス、愚身目腰以テノ外煩ウト雖モ、既ニ七旬ニ及ビ、無用ノ造作中々思モ寄ラザル事ナリ」

自分も悪い所が沢山あるが忙がしくて湯治にも行けないと嘆いているのである。

また天正十三年には次に引用する様に目の煩で再び悩み、灸や蛭療法をしている。第三期も虹彩炎脈絡膜炎等が多く、

また下眼瞼にはゴム腫もできやすいと言われる。(二三)

「天正十三、六、四 目煩ニ付、三里昨日百、今日六十仕ル

同、六、五 三里百仕ル、梅軒内薬給ウ、少シ驗ナリ

同、六、八 談議ニ金勝院来ル、目煩故ナリ、又薬五包給ウ

同、六、十一 目煩ニ蛭カキ然ルベキ由梅軒モ各同心ノ間、十疋バカリカウ処莫太吉シ

同、七、一 竹軒呼ンデ目煩見セル、殊ナル儀ナシ云々、薬一ツツミ置カル

同、七、二 目煩薬代五斗有梅へ遣セリ

同、七、六 目クスシ竹軒へ麵十把持チ礼ニ遣ワス」

有梅軒というのは近くに住む開業医であり、これに薬代として米を五斗払っている。また目クスシと言って目医者もいたことが注目に値するが、これには礼として麵を送っている。

(三) 第四期脊髄癆による失調症状出現 天正十四年(一五八六)六十九歳〜天正十七年(一五八九)七十二歳

天正十四年になると次の様な注目すべき記載がある。第一期の症状があつてから十七年経っているので、大体第四期の神経梅毒が始まる時期である。

「天正十四、七、一 社参、炎天老足弱々ノ間之ヲ略ス」

私はいこれを運動失調症の始まりと考える。次に目マイの記載もある。

「天正十四、八、六 聖教(経典)風入ニ屋へ上ルニ、ハシリニテ俄ニ目マイ臥シ、ノリモノニテ帰レリ」

この頃からしきりに行歩難治とか老足難治とか書いてあるが、英俊はこれを自分でも必ずしも老齡の為だけとは思えないといふことを次の様に書いてある。なお、社参とは興福寺の隣にある春日大社に参詣することである。

「天正十四、八、廿一 行步難治ノ間社參不能

同、九、十一 老足難治ノ間社參セズ

同、九、廿四 社參セリ、市ノ祐祖ニ逢ウ、満七ニナル、一段起居輕利、先月長谷寺へモ歩行ニテ參詣、諸根強力ナリト、愚身ヨリ一歳上ナリ、抑身ハヨロヨロ式ナリ、雲泥ノ相違々々、端ナキ者ナリ」

ヨロヨロ式とはいかにも脊髓失調性の歩行を表現している様に思われる。

またこの頃も瘡には悩まされていたらしく、瘡の名薬の処方聞いたものを次の様に日記に書きとめている。

「天正十四、十、十二 瘡ノ付ケ薬、眉間寺ノ相伝、万ノカサニ上々、至妙々々、雷丸一両、ユワウ、タウサ、ワウヘキ、ハラヤ、各二分ノ粉ニシテアブラワタニテ付ク最上々々」

またこの翌年には自分の体を省みて疾患が充満していると述べているが、既にこの時梅毒の第四期にまでなっていたとすれば、彼の認識はまことに正しいと言わねばならない。

「天正十五、六、廿九 年齢既ニ七十、古来希ナリ、一身ニ疾患充満、眼煩不断薬ヲ用イ、耳既ニ聞コエズ、鼻ハ数年沈香ジャ香モ忍辱モイラズ、齒ハ十年余リ先ヨリ悉ク落チ、舌ハ味無キ如シ、身根ハ腰痛行歩叶ワズ、意根ハ愚昧限り無し、ヨクヨク思エバ六根悉ク滅亡、露命今明ニ消エルヲ待ツバカリナリ」

彼はこう記しているのだが、五根の知覚は侵されているとしても、第六根の意根は愚昧ではなく、知的能力はまだあまり侵されていない様に思われる。

この翌年にも次の様に目煩や瘡に対する灸治の記載がしばしばある。

「天正十六、六、廿六 目煩カサカユキ間灸治セリ、カウカウ百ツツ、三里五十ツツ
同、六、廿七 又灸治同上沙汰ス

同、十、四 小瘡煩ニ付キ、三里上下二百ツツ沙汰ス

同、十、廿六 小瘡煩ウ間、又三里上下百ツツ沙汰ス」

(四) 第四期脳梅毒による抑鬱症状出現 天正十七年(一五八九)七十二歳(文禄三年(一五九四)七十七歳)

第四期の神経梅毒は脳と脊髄の實質が侵され、この期の脳梅毒は進行性麻痺あるいは麻痺性痴呆と呼ばれているが、英俊の場合は麻痺症状や痴呆症状は少なくとも日記からは読み取れない。しかし、高次精神機能を知情意に分けるとすれば、英俊に情の面の障害すなわち抑鬱症状がこの時期になって漸く現われて来た。

彼は天正十七年五月から横痃の再発に悩まされ、また目眩や食思不振も頑固で、同年八月には断食して自殺を企図したが死に切れなかった。客観的に見れば自殺する程の状態とも思えず、脳梅毒特有の抑鬱症状が作用していると思われる。この経過は日記に縷々と非常に長く記されているのだが、その要点を左に摘録する。

「天正十七、五、四 ヨコネ心ノ間出ズ

同、五、六 ヨコネ煩ウ間論ヘモ出ズ、平臥セリ

同、五、九 ヨコネニ灸治十一火セリ、又二度ニ蛭十一疋喰ワス

同、五、十四 ヨコネ散々ノ間、出仕ノ後ヤガテカガミテ帰レリ

同、五、廿六 ヒルカキ(蛭飼)沙汰ス、山帰来服ス、少シ驗ノ由」

横痃は通常第一期症状なのだが、アイヒホルスト^(二)によれば「硬結性便毒(横痃)ハ屢々、数月、数年ニ亘リ往々終生残留シ、数回腫脹ノ増劇ヲ来ス事稀ナラズ」とのことである。またここで服用している山帰来は土伏苓とも言われ、瘡毒の薬として珍重されたものである。『一本堂薬選』^(三)には「土伏苓ハ微瘡家一切必用ノ要薬」と書かれている。堺あたりを通して輸入されたものと思われる。

「天正十七、六、六 養性薬久シク服サザル故カ近日不食

同六、七 開心丸調合セリ、二百廿文ノ入目ナリ

同七、一 煩一段験ナリ、ヨノツネカユク腫モ和ギテヘル

同七、十二 ヨコネハヨシ、目舞不食、沈思々々」

自分で治療して横痃は良くなったが、目眩と食思不振が治らないので懇意な中治法眼という医師に診察を依頼した。

「天正十七、七、十九 愚身煩如何ニモ不食目舞心ノ間、法眼ニ申シ入レ、葉給ウ

同、七、十九 早且法眼御見廻ナリ、脈ハ少シ吉云々

同、七、廿九 煩験ナシ、薬モ一円効カズ、日ヲ追テ不食、熱気全ク引カザルノ間、法眼出デラルニツキ談合ノ処、兎角

分別ニ及バザルノ間、余人ニモ相談然ルベキ由、既ニ相捨テラルル間」

というわけで医者にも見離されたと思ひ、

「十日早死然ルベントフツト思イ切レリ、減後ノ様悉ク申シ置ク」

と十日間断食して死ぬことを思い立った。医師はもちろんまだ治療を尽くしたわけではないからそれは然るべきではないと諫めた。しかし、英俊は思い立ったことだからと、十日断食の予定を七日に減らし、その間に死ねばよし、死ななかつたらまた治療を受けましょうと言って臨終の用意に入った。どうも本気で死ぬ気ではなかった様だが、七日の断食で死ぬ筈もなく、八日目にはまた法眼が来て脈を取り、薬を服み食事もした。

その後いくらか元気になった様で、中治法眼はこの英俊ともう一人金勝院という僧の治療をしたことを興福寺から称美されて法印に昇進し、この後北庵法印と名を改めた。

しかし英俊の体の不調は続き、目眩とか不食、きよすらい 煩、腰痛等の症状があつて、北庵法印や他の医者意見も聞きながら、七生丸、香嘉散、開心丸、独活寄生湯、益気湯、活血湯等をあれこれと服用している。彼の頑固な食思不振は抑鬱症状だけでは割り切れず、肝臓等消化器のゴム腫の存在も考えられる。

(五) 第四期脊髓癆による電撃痛の出現 文禄四年(一五九五)七十八歳(文禄五年(一五九六)七十九歳

文禄四年の四月十七日からそれまでなかった様な激痛が出現し、八月末まで日記を書くことができず、症状が大体おさまった後でその経過を次の様に書いている。

「文禄四年四月十七日ヨリ俄ニ腰煩全々足コシ立たズ、八月末マデ旦夕常住平臥セリ、食ハ少ヅツク、メテ食タリ、大小(便)勿論丸ニテ取レリ、惣ノ身筋光ル様ニ寸時モ止マズヒラメキテ、苦痛堪エ難ク、高声ニワメキタリ、北法印ヨリ種々薬給ウト雖モ全ニ効カズ、之ニ依テ勲行モ日記モ筆取ル事モ叶ワズ、六月土用ヨリ必死ト覚悟セリ、余ニ術無キ間、無力干死^{ヒシニ}仕ルベシト覚悟セリ」

再び絶食死しようとしたわけだが、この時は前回と異なり本当に本当に死ぬ程の苦痛だった様である。しかしこれも何とか乗り越え、北庵法印から妙薬をもらったり、針灸療法をしたりして漸く

「七月ノ初ヨリ筋ノ光一円平癒セリ」

しかしもちろん痛みは残っているので、北庵法印は他の医師と相談して益損湯等を処方したり、あるいは針治療を続けたりして、八月の末には何とか助けられて起床できるようになった。

この経過を読めばこれが脊髓癆の電撃痛らしいことは容易に想像できるであろう。「惣ノ身筋光ル様ニ寸時モ止マズヒラメキテ苦痛堪エ難シ」とは、これ以上の表現はない様にすら思える。脊椎圧迫骨折や椎間板ヘルニアではこれ程の痛みがこれ程長く続くことはないだろう。これはまさに lancinating pain または lightning pain にピッタリである。通常は下肢に放散するが、顕著な場合は軀幹にも及ぶと言われる。⁽¹¹⁾

翌年の文禄五年の三月にも「近日以テノ外再発、北法印来リ、脈取ル処殊ナル儀ナン云々、薬三包給ウ」などとあり、薬物治療や針治療をしている。

英俊が書いたと思われる『多聞院日記』はこの文禄五年で終わっている。おそらく日記を続けられない様な健康状態になったのだろう。ただし文禄五年の日記の後に、英俊が自分の少年時代から晩年に至るまでの思い出をまとめた記録が付けられている。自分の最後が近いことを予期して英俊が書いたものと思われる。その後、他の筆者によって日記は少し書き継がれているが、英俊の転帰についての記録は残っていない。想像をたくましくすれば、三度目の干死ひしを試みて大往生したのであろうか。

四 結 び

以上述べたことにより、多聞院英俊が梅毒の第一期から第四期までを経過したことが相当の確実性を以て言えるのではないかと思う。この様な梅毒史の初期の症例でこれ程長期の経過がわかる者はおそらく世界でも稀であろう。古今東西の文献を渉猟した土肥の『世界梅毒史』^(九)でもこの様な例は紹介していない。

土肥は安土桃山時代の症例として、曲直瀬道三の『師弟問答』から比較的詳しく記述されている一例を引用しているが、それも三年間の経過しかわかっていない。土肥はまた有名人の梅毒の症例として徳川家康の息子の秀康をあげ、鼻がつぶれた話などを書いている。

『多聞院日記』では有名人の症例としては豊臣秀吉の弟の秀長がある。秀長は大和、和泉、紀伊を支配する為に大和郡山にいたので、奈良の英俊の所には情報が入りやすかった。英俊の記述によれば、秀長は天正十五年に横痃が悪化した為、乗り掛けというものに乗って京都の医者の許へ治療に行ったが、はかばかしくなかった。その後、有馬温泉へ湯治に行ったりしたがやはり良くならなかった。その為、悪瘡で人に会えないとか、もう死んだとかの噂が流れたが、本当に死んだのは天正十九年一月である。梅毒で悪い経過を取ったということが充分考えられる。

安土桃山時代の頃は梅毒に対して性行為感染症という觀念が薄かったことは前にも述べたが、『多聞院日記』に記載されている僧は、自分は青ソ(麻)葉を食べた後で唐瘡が出たので、あれが原因だろうなどと言っている。この頃来日した宣教師のフロイスは『日欧文化比較』^(二二)の中で、「我々は横痃にかかったら、それを常に不潔なこと破廉恥なことと思うが、日本人は男女共にそれを普通のこととして少しも恥じない」と述べている。しかしヨーロッパでも十六世紀初めの梅毒流行の初期には性病という認識はなかったのである。^(一九)

安土桃山時代の日本では梅毒はまだ珍しい病氣位にしか考えられていなかったが、江戸時代になればやはり不潔なものとなされた。しかし必ずしも性行為だけが原因と考えられたのではなく、大体において湿毒が原因という病理観が一般であった。従って江戸時代には梅毒は俗にかさともしつとも呼ばれた。黴瘡というのも湿氣と関連した名称であり、黴毒という名称は江戸中期以後に現われた。梅毒という字は感心しないと富士川は述べている。^(二四)

最後に多聞院英俊の名誉の為に再度述べておきたい。英俊は常に自ら省みて真の発心修行をしないことに慚愧の念を抱く真面目な僧であった。彼は二十二歳から七十九歳までの足かけ五十八年間、克明に日記を書き、その後半の二十八年間は梅毒に蝕まれたが、最後まで知的好奇心は衰えず、自己の症状も客観視して日記を書き続け、後世に大きな資料を残した。疾患に対して種々の治療を自ら行なったことは従来述べた通りだが、彼はまた病魔に負けない記録魔であった。本論文を彼の靈魂の鎮魂の為に捧げたいと思う。

文 献

- (一) 辻善之助編『多聞院日記』角川書店、昭和四十二年
- (二) 永島福太郎、『奈良』吉川弘文館、昭和三十八年
- (三) 中村 昭『多聞院日記』に現われる伝染病の検討」第八十五回日本医史学会総会、昭和五十九年
- (四) 同『多聞院日記』に現われる皮膚疾患・化膿性疾患の検討」第八十六回同総会、昭和六十年

- (五) 同『多聞院日記』に現われる風病の検討』第八十七回同総会、昭和六十一年
- (六) 同『多聞院日記』に現われる消化器疾患の検討』第八十八回同総会、昭和六十二年
- (七) 同『多聞院日記』に現われる精神神経疾患の追加』(誌上) 第八十八回同総会、昭和六十二年
- (八) 富士川游『日本医学史』明治三十七年、形成社、(復刻) 昭和四十九年
- (九) 土肥慶蔵『世界微毒史』大正十年、形成社、(復刻) 昭和四十八年
- (一〇) 幸田成友『日欧通交史』岩波書店、昭和十七年
- (一一) P. F. Sparling, Syphilis: Cecil's Textbook of Medicine, 15th ed., W. B. Saunders, 1979
- (一二) アイヒホルスト (Eichhorst) 著、広瀬桂次郎訳『愛氏内科全書』朝香屋書店、明治三十年
- (一三) 蘆川桂洲『病名彙解』貞享三年
- (一四) 安楽庵策伝『醒睡笑』寛永五年、岩波文庫、昭和六十一年
- (一五) 奈須恒徳『本朝医談』文政五年、杏林叢書、上、思文閣、昭和四十六年
- (一六) 有隣『福田方』日本古典全集刊行会、昭和十一年
- (一七) 横佐知子^{精説}『大同類聚方』平凡社、昭和六十年
- 私は現存の『大同類聚方』は土肥と同様に江戸初期十七世紀頃の作と考えたい。
- (一八) 源順『和名類聚抄』元和三年
- (一九) 梶原性全『頼医抄』正安四年、科学書院、昭和六十一年
- (二〇) 香川修徳『一本堂薬選』享保十四年
- (二一) 和気惟享『徽瘡約言』享和二年
- (二二) 樋口謙太郎『新皮膚科学』南山堂、昭和五十三年
- (二三) ルイス・フロイス『日欧文化比較』大航海時代叢書Ⅺ、岩波書店、昭和四十年
- (二四) 富士川游『医史叢談』書物展望社、昭和十七年

神奈川県総合リハビリテーション事業団
七沢リハビリテーション病院

A Pathography of Tamon-in Eishun —A Case of Syphilis in the 16th Century Japan

by Akira NAKAMURA

The majority of the chronicle of Tamon-in was written by a buddhist namd Eishun. He wrote daily about the affairs of buddhist temples, politics, economy and contemporary epidemics. Besides these he described his own ailments and treatments. The author discovered syphilitic symptoms among Eishun's descriptions, including primary stage to late neurosyphilis, lasting 27 years.

At first Eishun described his chancres and inguinal lymph node enlargement (primary stage). Thereafter, he wrote of small skin rashes and ocular trouble (secondary stage) during his 52nd and 53rd years.

At the age of 58, Eishun wrote about his nasal collapse, which is thought to be due to gummatous lesions (tertiary stage).

At 69 years old, signs of late neurosyphilis appeared. For example, from this year he frequently wrote about his ataxic gait (probably tabes dorsalis). And at 78 years old, he suddenly began to suffer from violent lightning pain (tabetic pain) over a period of about 3 months.

His chronicle ended the next year, but the year of his death is not known.